

「ペルジーノ風」ステンドグラス
—1500年前後のジェズアーティ僧の活動とフィレンツェの画家たち—

東京大学 伊藤 拓真

1500年前後のフィレンツェでは、ペルジーノやその周辺画家の下絵に基づくステンドグラスが多数制作された。ルネサンス期のトスカーナにおいて制作された大部分のステンドグラスと同様、これらの作品(ここで仮に「ペルジーノ風ステンドグラス」と呼ぶ)もまた、下絵を提供した画家とそれを実際の作品にするステンドグラス師による共同制作の成果であった。ペルジーノ風ステンドグラスの実制作を担当したのは、フィレンツェのサン・ジュスト修道院で活動していたジェズアーティ僧である。しかしながら、O・フィッセル、G・マルキーニらによる先行研究においては、画家に注意が集中するあまり、ジェズアーティ僧に関してはおさなりに扱われてきた感がある。本発表においてはこれらの先行研究の不足を補うため、作品制作における彼らの役割に注意を払いつつ、画家とステンドグラス師の共同制作の実態を探っていく。

考察を進めるにあたっては、フィレンツェのサント・スピリト教会ファサード中央の丸窓《ペンテコステ》のほか、同サン・サルヴァトーレ・アル・モンテ教会やシエナ大聖堂に残されたステンドグラスなどを実例として取りあげる。まず初めに、これらの作品をペルジーノやその工房の絵画作品と比較し、類似点と相違点を確認する。そして、時に複数の作品が同一の下絵から制作されたことを示しつつ、その下絵の再利用の方法を分析する。これらの議論を通じ、ステンドグラス師が画家から提供された下絵を工房に保管し、必要に応じてそこに改変を加え、彼ら自身の判断のもとに再利用していたことを示す。それに加え、ジェズアーティ僧に関しては、1500年前後のステンドグラスの展開において、より積極的な役割を果たしたのではないかと提言する。この時期のステンドグラスには、ペルジーノ風の外観をもつ人物表現のほか、古代風の建築背景、シルバーステインを多用した枠装飾などの新しい要素が導入され急速に広まった。このような新潮流に、ジェズアーティ僧による集団制作が大きな関わりを持っていたと考えられるのである。

これまでの研究においては、ジェズアーティ僧は画家から提供された下絵を敷き写し機械的に制作を行うだけの職人として扱われることがままあった。しかしながら本発表において提示される彼らの活動の実態は、このような見方が一面的なものであることを明白にするだろう。ステンドグラス師の作り手としての特質が、個別の作品制作において画家のそれに劣らぬ重要性をもち、またステンドグラスという芸術形態の変遷においても無視できないものであったことを指摘し、その上で、ステンドグラス師と画家の共同制作の一形態を提示することが本発表の目的である。